

農業から得られる“学び”を 多くの生徒に体験してほしい。

農業で学んでほしい、農業で教えたい。その思いから教師に転身

生物生産科で農産物の栽培技能や知識に関する指導を行う大田先生。高校卒業後に進学した大学では農業とは異なる分野を学びましたが、農家に就職したことがきっかけで農業の面白さややりがい目覚め、「これからの福井の農業を支える人材を育てたい」という思いから一念発起！ 農業大学へ編入して農学の専門知識を学び、教員に転身したという経歴の持ち主です。

「農業は育てる楽しさや収穫の喜びに加え、流通、販売にも直結するやりがいのある分野。自分が作った農産物を“おいしかったね”と食べてくれる人たちの声が励みになり、努力や工夫を重ねたことに対する反応をダイレクトに実感することができるのも農業ならではの魅力です。生徒たちには米や野菜などの“生きた教材”を通して、幅広い知識や技術を学んでほしい。」

現在学校では年間約15種類の野菜を栽培しています。企業とコラボレーションした新しい栽培方法の実践や、福井市の新しい特産物“金福すいか”の栽培、福井初となるトマトのポット栽培など、時代に即した新しい取り組みにも生徒と共に積極的に挑戦しています。

福井県立福井農林高等学校
大田 光宣先生



「雪が多く、日照時間も少ない福井の自然環境は、農業をする上で全国的にみると決して恵まれている方ではありませんが、そうであっても福井ならではの栽培方法や新たな特産物を生徒と共に生み出していきたいですね。近年は猛暑続きでトマトなどの夏野菜ができにくくなってきているので、春や秋など、時期をずらして栽培する技術も確立できればと試行錯誤しています。」と話します。

「座学よりもやっぱり実習の方が好き」と笑う先生。学校がある日はほぼ8割方農場に出て動いている分、休日には景色のきれいな場所にドライブしたり、海でのんびり釣りを楽しんだりリラックスして過ごすことが多いのだとか。「職場の雰囲気も和気あいあいとしていて、他の先生方ともコミュニケーションが取れているので仕事でやりにくさを感じたことはほとんどありません。学校内では情報関係を担当おり、図書室で仕事をするのも多いのですが、静かで落ち着いた図書室は居心地も良くて、学校の中でも好きな場所のひとつです。」と笑顔を見せます。

(2へ続く)

農業から得られる“学び”を 多くの生徒に体験してほしい。

福井の農業を支える人材を 一人でも多く育てていきたい。

「野菜ではトマトが一番好き。手をかければかけただけ返してくれるから。」という先生。植物の素直さをよく知る先生だからこそ、生徒たちにも“野菜作りは人に接するように優しく”を一番大切なこととして教えていると話します。

「私が担任を持つクラスには32名の生徒がいますが、農業経験者はわずか3、4人だけ。ほとんどが全くの初心者から農業を学ぶことになります。それだけに収穫できた時の喜びや感動は見ているこちらもうれしくなるほど。“スーパーより学校の野菜の方がおいしい!”という生徒も多く、野菜の特徴や味わいの違いがよくわかっているな、と感心させられますね。実った野菜を見て“先生、食べていい?”と聞いてくる姿を見ると、農業は生産者と消費者が直結している分野だなと実感します。」と笑います。そんな先生に教員をしていて印象に残ったエピソードを尋ねると、「今受け持っている生徒たちは2年、3年と続けて担任しているのですが、2年生の時は生活習慣の乱れが目立ったのですが、3年生になったら全員の意識が変わったのか、急に乱れが少なくなりました。就職を見据え始めることもあってか、分からない専門用語を自分で調べてくるなど自発的に動く生徒も増えてきて、その成長に驚いています。」と先生。

在校生だけでなく、卒業生から社会人として一生懸命仕事をしている話や、“高校時代の実習が楽しかった”などの思い出話を聞くと、学生時代とのギャップや成長を感じて改めて頼もしく思うことが多いのだとか。「学校でも、私が忙しくて手が離せない時には生徒がサポートしてくれるなど、生徒たちに助けられることも多いです。そうした助け合いや思いやりの心を社会に出ても生かしてもらえたら。」と話します。

「今後、生徒たちにはスマート農業などの新しいやり方に加え、従来の農法もしっかりと身に付けながら、福井の環境の中で少しでも付加価値の高い農産物を生み出せる栽培技能や知識を身に付けてほしい。」と先生。そのために自分自身も企業への派遣研修などを通じて、より専門性の高い農業技術を学んでいきたいと意欲的です。その表情からは生徒に対する愛情もうかがえました。



海外で得た語学と経験を 福井の子どもたちに伝えたい!!

“楽しく学ぶ”を実践する コミュニケーション重視の授業

子どもの頃に経験したシンガポールでの生活に加え、中学校時代にはアメリカ、高校でニュージーランド、大学ではカナダと、豊富な海外経験を持つ佐々木先生。「もともと英語を使う仕事に就きたいとは思っていましたが。キャビンアテンダントに憧れた時期もありましたが、共に教員をしている両親から“英語の先生という道もあるよ”とアドバイスもらったこともあり、高校生の頃から教員の道を意識するように。県外の大学に出て改めて福井の教育環境に魅力を感じ、“英語を使って地元で働きたい”と福井で教員をめざすことを決めました。自分が感じた英語の楽しさや海外の魅力を、福井の子どもたちにも知ってほしかったんです。」と話します。

先生が進める英語の授業ではスピーキングに重きを置き、言葉のキャッチボールができる内容を意識しているそう。福井の生活では実際に英語を使うシチュエーションも少ないため、先生自身もALTと積極的に英語で話したり、動画サイトなどで生きた英語をチェックしたりしながら、英語力が落ちないように気を付けているといいます。

越前町立織田中学校
佐々木 麻衣子先生



現在は中学1年生を担当していることもあり、小学校で学んだ英語とスムーズにつながるよう授業を組み立てつつ、自作のプリントやパワーポイントを活用しながら確実に身に付けさせたい箇所を強化しています。英語ならではのノリや雰囲気も大切に“楽しく学ぶ”をモットーにした授業は、生徒たちとの一体感も抜群!! そんな先生の授業に触発され、海外留学を決めた生徒もいるのだとか。

「“英語って、海外って楽しい!!”という思いは私の原点。だからこそ、生徒たちには英語に苦手意識を持たずに、楽しみながら学んでもらいたいと思っています。私自身が海外を知ることによって気づいた日本や福井の魅力を発信しつつ、これから世界に出ていく子どもたちが日本のため、福井のためにどうしていったらいいか、改善策を考えられるような授業を作っていきたい。」と目を輝かせます。

(4へ続く)



海外で得た語学と経験を 福井の子どもたちに伝えたい!!

理想の教員像への道を支えるのは 生徒と同僚、家族のチカラ

「今の職場は年代関係なく、どの方もとにかくフレンドリー！ コミュニケーションも多く、プライベートな相談も気兼ねなくできる居心地の良さも抜群です。また、誰か一人が仕事を抱えそうなときは“みんなでシェアして早く帰ろう！”と自然に声をかけ合う雰囲気にも助けられています。」と先生。実は両親をはじめ、ご主人や義父も教職に就いており、家族の支えやアドバイスも大きな力になっていると話します。

これまでの教員経験の中で、勉強が苦手な生徒と一緒に勉強しながら志望校合格に導いたことや、内気な生徒が一生懸命クラスを引っ張る姿をサポートしつつ、合唱コンクールで優秀賞を獲得したことなど、生徒に寄り添いながらその成長を間近で実感してきた先生。「昨年、教員になって初めて教え子の卒業式を経験したんですが、“先生が担任でよかった”と言われたのが本当にうれしくて。そんなことを言うとは思わなかった子からの一言だったので、余計に感動してしまいました！ 教員ならではのやりがいや醍醐味を感じる、忘れられない経験ですね。」と振り返ります。

「私はこれまでの留学経験で、一期一会の出会いの素晴らしさや、色々な人に助けられて今がある感謝の心を学びました。だからこそ、縁あって同じクラスになった生徒たちにはこの学校で一生の友達を作ってほしいと思っています。」と話す先生。今後は学級経営にさらに力を入れつつ、生徒一人ひとりにとって居心地の良い環境づくりや、全体を向上させるために、全員が同じ目標に向かって頑張る経験をさせられる教員になりたいと目標を語ってくれました。

自作の教材と流暢な英語を使い、テンポよく授業を進める姿からは「大好きな英語を生徒たちにも楽しみながら学んでほしい！」という思いが響いてきます。先生を見つめる生徒たちの笑顔や目の輝きからも、信頼感や授業の楽しさが伝わってきました。



ヨルダンでの経験で学んだ 「挑戦」と「記録」の大切さ

難民キャンプでの2年間で 教員の基本を教えてくれた。

大学院業修了後、青年海外協力隊としてヨルダンに赴き、難民キャンプの中にある中学校で体育授業の指導支援に携わった森本先生。言葉や文化を学びながらの2年間は挑戦の連続だったと話します。「最低限のアラビア語は学んだ上で赴任しましたが、実際の日常会話には方言が使われており、最初の頃は全く言葉が通じなくて苦労しました。毎日学校が終わった後にコツコツと勉強し、「話せるようになった」と実感するまでには1年半かかりましたね。」

また赴任先の中学校での指導も、一筋縄ではいきませんでした。「現地の子どもたちがルールを知っていてやったことのあるスポーツと言えばサッカーぐらいでした。他の競技はもちろん、馬跳びのやり方も知りませんでした。そんな子どもたちにバスケットボールや大縄跳び、リレーなど、様々な競技を通して運動の楽しさやルール大切さを教えることは本当に大変でしたが、やりがいは大きかったです。」と振り返ります。中でもバスケットボールをアレンジしたオリジナルスポーツ“サムライボール”は、子どもたちが大好きな競技のひとつ。先生は他の難民キャンプに居る日本人ボランティアと協力して、スポーツ大会を企画するなど、子どもたちの交流にも力を入れてスポーツの輪を広げていきました。

若狭町立明倫小学校
森本 和馬先生



さらに、赴任当時の学校では子どもたちのケンカや衝突も多く、授業がスムーズに進められないことも多々ありました。「そうした状況を変えるため、何の授業でどんなトラブルがあったかを約1年間、徹底的に記録し続けました。その記録を分析し、原因を突き止めて改善したことで、トラブルが激減したんです。」という先生。2年間積み上げてきた現地の子どもたちとの絆は、写真の笑顔からも伝わってきます。

福井で教員をする現在もヨルダンでの経験を子どもたちに話すそうです。また、日々の授業の準備と記録のために“授業ノート”を独自に作成するなど、海外での指導経験で得た工夫と努力を続けています。

“まず自分がやってみせる”を 大切に、生きた教育を実践したい。

「子どもたちに求めることは、まず自分がやってみせることを大切にしています」と話す先生。現在は2年後に統合が決まっている明倫小学校の校舎を描き残したいと、子どもたちと一緒に写生画に取り組んでいます。「自分で描いてみることで、デッサンや彩色のコツをつかみ、それをもとに指導しています。」とのこと。見せていただいた子どもたちの作品は同じモチーフを描いているのにどれも個性的で、大好きな学校に対する思いが伝わってきました。

(6へ続く)

ヨルダンでの経験で学んだ 「挑戦」と「記録」の大切さ

また、昨年は共生社会をテーマに、“パラリンピック教育”を実践。ゴールボール日本代表コーチを指導者として招いて授業をしたり、ゴールボール日本代表選手団と手紙や動画のやり取りをしたりするなど、子どもたちにとって少し遠い存在だった障がいのある方と間近に触れ合える機会を設けました。「最初、子どもたちに障がいのある方たちの印象を尋ねるとほとんどの子どもが“かわいそう”と答えました。しかし、パラリンピックスポーツについて学んだり、体験したりすることで、“すごい！”“一緒にできることがこんなにあるんだ”と多くの驚きや発見をし、障がいのある方たちに対してこれまで持っていた“見えないバリア”がなくなっていくのを感じることができました。」と先生。

授業の中では、点字で書かれた手紙が3kgまでなら無料で郵送できることや、永平寺町で進められている小型電動車の自動運転実験の取り組みなど先生自らが調べた情報も盛り込み、子どもたちがより幅広い学びを得られるように工夫したといいます。

現在、こうして日々意欲的にオリジナリティあふれる教育に取り組んでいる先生ですが、“まず自分が”というこだわりの原点には、きっかけになった大きな出来事があったと話します。

「実はヨルダンから帰国してすぐの頃は“ガッツと気合いさえあれば何でもできる”と思っていました。しかし、ガッツと気合いだけでは上手くいかないことが多くて、悩みました。困った末に、これはやはりきちんとした知識を持たねばと思い、本やセミナーなどを活用して勉強を始めたんです。そうして学んだ知識を生かして実践したところ、少しずつ納得のできる仕事ができるようになっていきました。」この経験をもとに、「自分自身がしっかりとした知識や技術を身につけることが、子どもたちの成長につながる」と確信した先生。“もっと勉強して良い教員になろう”という思いが、今の“生きた教育”につながっていることを実感させられるエピソードでした。

子どもたちには自分の経験から“どんどん挑戦して、失敗しなさい”と伝えています。私自身も今後さらに挑戦しながら勉強し続け、子どもたちの良い所を見つける目と、楽しくて力の付く授業ができるスキルを磨きたいですね。」と語ってくれました。



子どもたちの小さな変化が 喜びとやりがいにつながる

何もかもが初めての 中、学び、教え、成長した一年間

大学の授業では視覚障がいに関するカリキュラムが少なく、盲学校に来て初めて視覚障がいの子どもたちと関わったという竹内先生。着任当初は点字も読めず、視覚障がい者への配慮や指導方法についても分からず、不安でいっぱいだったと振り返ります。

「私はもともと家族に障がい者がいたことから、自然と障がいのある方に関わる仕事がしたいと思っていました。県外の大学で障がい児教育を学んで地元・福井県に戻りましたが、視覚障がいについての知識はほとんどゼロ。盲学校に赴任後、先輩の先生方や子どもたちに一から教えてもらいながら、少しずつ視覚障がい教育についての知識を学んできました。」

視覚障がい者と一言で言っても、全盲の方から弱視（ロービジョン）の方まで見え方は千差万別。また、視覚のみの障がいだけでなく、視覚と知的障がいなど、複数の障がいを併せ持つ重複障がいの方も多く、一人ひとり必要とする支援や指導は異なります。「視覚障がい者は光の加減によって見え方が変わったり、まぶしさを強く感じたりすることがあるということも盲学校に来て学びました。教室には遮光カーテンが設置されているので、子どもたちが見えやすい明るさになるよう、時間ごとにカーテンを少しずつ開け閉めしながら微調整しています。」と先生。

福井県立盲学校
竹内 朱音先生



「働き出して一年が経った今では点字が読めるようになり、見えにくさやまぶしさに配慮した教材づくりを意識できるようになってきた。」と話します。

「子どもたちは障がいの影響から経験が不足していることが多いため、授業の中で様々な体験ができるような活動を設定したり、教材を準備したりしています。使う教材は一人ひとりの障がいの程度に合わせ、文字の大きさや行間はもちろん、見えやすいような色のコントラストがハッキリしているものや、素材の音やにおい、触感の違いなども意識していますね。」と先生。

教材は子どもたちに合ったものを自作することも多いそうで、見せていただいた“さわって分かる時間割”は、四角い木の板に体育の時間は体育館の扉のような音が鳴る素材、給食の時間には小さなスプーン&フォークなど、それぞれの教科や活動をイメージさせる素材を貼ることによって、目の不自由な子どもたちが触り心地や音で教科を確認できる優れたもの!! 子どものために知恵を絞りながら、より良い指導に向けて努力を重ねる姿に頭が下がります。「時には頑張って作った教材がうまく子どもとマッチせず、思いが伝わらないこともあります。試行錯誤を繰り返しながら一人ひとりに合わせた教材を考えるのも楽しいです。」と笑顔を見せます。

(8へ続く)

子どもたちの小さな変化が喜びとやりがいにつながる

小さな変化に感動!!子どもからの学びや気づきを大切にしたい。

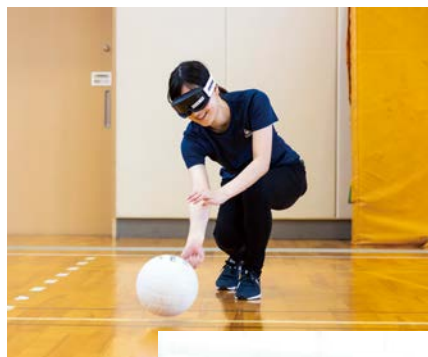
「子どもたちと接する上で最も大切にしていることは、信頼関係です。授業や日々の生活を一緒に過ごしていく中、どんなに支援をしても、信頼関係がなければこちらの思いは伝わりません。そのため、日々の子どもたちとのやり取りを大切にしています。」と話す先生。視覚障がいのある方に“静かに近づいてこれると、急に気配を感じてビックリする”と教わってからは、廊下ですれ違う子どもたちにも積極的に声をかけるなど、小さなコミュニケーションを増やしながら一人ひとりとの絆を深めています。

「子どもたちの成長は日々感じられます。うまく言葉で伝えることができない子ども、表情や動きの小さな変化で伝わってくるもの。それだけに、教員・保護者・寄宿指導員など子どもと関わる人たちと情報共有しながら、小さな変化を見逃さないように意識しています。」と先生。実は昨年、初任者研修の中で行った公開授業（指導主事訪問）で、子どもの成長と新たな一面を発見する忘れられない経験をしたのだとか。

「指導主事の先生や校内の先生方に、自立活動の授業を見ていただきました。担当していた子は、とても人見知りをする子だったんですが、その日は多くの人がいってもあまり動じることなく、授業に集中してくれました。私自身もとても緊張していましたので、この日は子どもに助けられた！と感じました。この子どもは自分から思いを伝えられる子ではなかったんですが、いつもと違う様子を感じても頑張ってくれたことが伝わり、本当にうれしかったですね。」

ほかにも病気の影響で発声がほとんどなかった子どもが自分から意思を言葉で伝えてくれた時の感動も忘れられないという先生。“子どもの反応があるまで待つ時間を作ること”の大切さにも気づかされ、教員として着実にスキルアップしている様子が伝わってきました。

特別支援学校での指導は子ども一人ひとりに合わせたオーダーメイドの支援が必要な教育現場だけに、子どもと関わる教員にはたゆまぬチャレンジ精神や観察力・想像力が必要。「ほかの先生方の授業や支援の様子も参考にしつつ、子どもと共に学び続ける教員をめざしたい。」と目標を語ってくれました。



大好きな子どもたちのため、 “学び続ける”教員でありたい。

福井は教員がスキルアップできる 環境が整っていることを実感

「元々子どもは好きでしたが、教員になってより一層大好きになりました!!」と笑う米村先生。先生が教員になりたいという夢を抱いたのは、中学生の頃。熱心に教えてくれる担任や部活動の顧問に憧れを持っていたことや、友達に勉強を教えた時に「ありがとう!」と喜んでもらえるうれしさがきっかけになったといいます。

「キャリア教育で将来の夢を考えた時、“何となくだけど、教員になりたい”と担任の先生に伝えたところ“きっといい先生になるわ!一緒にいると楽しいし、あなたにはみんなを幸せにできる力があるよ!”と背中を押してもらえたことも大きかったですね。その頃の自分はみんなと仲良く楽しく過ごしたいという思いから、男女問わずいつも友達を笑わせようと冗談を言ったり、ふざけたりして賑やかにしていました。当時から、どんなことにも前向きに率先して取り組み、自分の元気や明るさでみんなと常に楽しく過ごしたいと思っていました。先生の言葉をきっかけに教員という仕事をより意識するようになり、憧れの恩師たちのように自分の個性を生かしながら、“毎日学校が楽しい”と思ってもらえる授業や学級をつくりたいと思うようになりました。」

先生が教員の夢を叶える場所として福井県を選んだのは、地元だからという以外にも“学力・体力トップクラスの福井県で教員としての資質や能力を高めたい”という思いがあったからだと話します。「実際にこれまで何人も素晴らしい恩師と出会い、教員として大切なことを数多く教わってきました。同僚をはじめ、どの先生方も“子どものため”という共通理念をもって活動しているので、互いに支え合いながら今できる最善をめざせるのも心強いですね。」と先生。

福井市円山小学校
米村 佑太先生



過去には近隣小学校の若手教員たちと自主サークルを作り、実践内容や授業を互いに評価し合ったり、講師を招いて学んだりして、スキルアップをめざす活動も実践。このサークルで知り合った先生方とは今でも連絡を取り合い、仕事のことで情報交換し合ったり、プライベートでも遊んだりして、仲良く支え合っていると教えてくれました。

また、平成30年度には文部科学省が行う小学校外国語研修の授業者として英語の指導力を磨き、全国から集まった教員に授業を公開し、当時の直山視学官から高い評価を受けた実績も。その後、文部科学省が監修する月刊誌「初等教育資料」に記事を執筆した経験も。これらの学びを生かし、現在は担当している学年3クラス全ての外国語の授業を先生が担当し、音楽や家庭科などは他の先生に任せるなど、教員同士が互いの長所を生かして役割を分担しながらより良い教育の実現を目指しています。

現在も、自分の授業公開、他の先生の授業参観、検討会や反省会などの勉強会を通して、日々実践を重ねながら、よりよい教育のために学び続けています。「自分の頑張りや評価してもらえる場や機会も含め、福井県には教員として成長できる環境が整っていることを実感しています。」

(10へ続く)

大好きな子どもたちのため、 “学び続ける”教員でありたい。

“わかる・できる+楽しい” 授業づくりが目標

「仕事のやりがいは毎日感じています。授業中に子どもたちが生き生きと活動に取り組む、“わかった！できた！”と喜んでくれる姿はもちろんですが、子どもたちが何気なく発する“楽しかった”“えーっ、もうこんな時間？もっとしたい”などの言葉や、楽しそうに過ごす様子・笑顔もうれしいですね。」と話す先生。

昨年度は6年生の担任を持ち、「子どもたちと共に取り組んだ“太陽プロジェクト”の成功が忘れられない。」という先生。太陽プロジェクトとは1年間「太陽」という学級目標を掲げ、様々なことに挑戦して太陽のように光り輝いて活躍すること、最上級生として友達や下級生を照らすことができるように活動に取り組むというもの。2学期の係活動では子どもたちと一緒に卒業までにしたいことを考え、卒業文集と卒業記念映画を作成することになり、企画・準備・進行まで全て子どもたちの手でやり遂げました。

「卒業式まで様々な企画に挑戦し、子どもたちがやりたいことを全力でサポートしてきました。クラスが一丸となって目標を掲げ取り組む中で、団結力や絆が深まり、達成感や満足感も感じられ、心に残る最高の思い出を作り上げることができました。」と振り返ります。こうした経験を経て迎えた卒業式では子どもたちの名前を一人ひとり読み上げ、「“はい”という立派な返事や体育館中に響き渡る歌声、凛々しく堂々と歩く姿に教師としての喜びや感動を実感することができました。」と先生。

「子どもたちの成長を願って準備してきたことが子どもの心に響くとき、また、子どもを認め、励ましながら寄り添い、成長を肌で感じられた時はこれ以上ない喜びと達成感を感じることができます。人を育てる責任の大きさを実感しつつも、自分が努力を重ねただけ子どもの成長につながる教員という仕事に大きな魅力とやりがいを感じますね。これからも常に最善の教育ができるよう、学び続ける教員でありたい。」と目を輝かせます。

そんな先生が目指すのは、内容を理解するだけでなく“楽しさ”を感じられる授業。「やる気を引き出す“仕掛け”と子どもと共に45分を作り上げる“臨場感”を大切にしたい理想の授業を実践していくため、日々指導力を磨いています。また、一人ひとりが自分の良さや努力、成長を実感できるように、“すごい！”や“ありがとう”など、自己肯定感を高める声掛けも意識しています。」と話す先生。子どもたちとのコミュニケーションや弾ける笑顔からも、授業の楽しさや先生への信頼感が伝わってきました。

